

種名は

Kuromatea glabra (THUNB.) KUDO, *comb. nov.* = *Quercus glabra* THUNB. Fl. Jap. p. 175. としたいと思ひます。終りに、正宗理學士に對し深厚の謝意を表したいと思ひます。

臺灣植物分類雜纂 (7)

(圖版 III.)

佐々木舜一

Miscellaneous contributions to the Flora of Formosa VII.

(Pl. III)

Syun'iti Sasaki

(48) 新植物いこまさう (新稱)

本種は大正十一年七月予の南湖大山一萬二千尺に於て初めて採集せるものなるも、如何なる譯か充分の採品を得ず誠に遺憾とする處であつた。然るに臺灣山岳會の有志を以て組織する、大霸尖山登攀會なるものが昭和二年八月、生駒高常氏を隊長として組織された。勿論大霸尖山なるものには曩に伊藤太右衛門氏が登山して、珍種の採品を齎して學界に數多の寄與をした。然れども同氏の登山は大霸尖山には相違なきも、其の最高點たる中央岩壁の登攀はなし得られなかつた。茲に於て隊員たる生駒、沼井、古平氏等は五百尺に垂んとする、而も蕃人さへなし得なかつた岩壁の初登攀を萬難を排して決行し、遂に此處女峰を征服して數多の新植物を採集し、予に其の悉くを提供された、所謂命懸けの貴重なる材料であつた。本種は數多の植物中の一品であつて生駒氏以下の隊員が犠牲的努力を傾注して學界に寄與された事を思へば、予は萬腔の誠意を表して其の成功を祝福し、併せて當時の隊長たりし生駒氏に對し感謝の意を表せざるを得ない、そこで予は茲に同氏の姓を冠し、本新植物に「いこまさう」の新和名を下し、以て永久の記念とする。

***Pedicularis Ikomai* SASAKI, sp. nov.**

Perennial herbs; stems fasciculate 5 to 10 from the base, throughout pubescent, 25-27 cm high, 3 mm in diameter, dark brown; internode base about 4.5 cm long upper shorter. Leaves opposite, elliptic to cordate 2.5 cm long, 1.5 to 2 cm wide, pinnati-partite, obtuse to acute at the apex; leaflet oblique, dentate at the margins, midrib distinctly. Petioles 3-5 mm long. Spikes terminal, adpressed with 4-5 flowers; bract fan shaped, 1.1 cm long 4 mm wide, 3 partite at the apex, peduncles 2 mm long. Calyx semi-saccate, 2-clefted; clefts 8 mm long, 5 mm in diameter, boat shaped, slightly pubescens on the veins, lower cleft 3-toothed at the apex. Corolla purple, cylindrical, bilabiate, 3.1 cm long, 1.2 cm wide; upper lip galeate, lower lip rounded, 3 partite at the tips; lateral ones larger and rounded, center smaller, only 3 mm. in diameter. Stamens 5, rarely 4, not didynamous, about 2.5 cm long; filaments filiform, inserted in the upper lip, densely pubescent; anthers versatile. Style 1, bending down in the inside of the upper lip.

Jap. Nam. Ikoma-sô (n. n.)

Loc. Mt. Taiha-senzan, 10000 feet above the sea level (Takatsune Ikoma and Katuzô Kodaira, Aug. 1927).

Endemic plant.

Note: Near *Pedicularis euphrasioides* STEPH, but differs from it in having 5-stamens, smaller flowers and higher stems.

本種は玄參科しほがま屬の多年生草本で、短縮せる宿存莖より一乃至十數本の新莖を叢生し、夏期梢頭に短縮せる穂狀花序に數箇の大なる筒狀唇形花冠を著生し、其の色帶紅紫色、頗る幽雅なり。雄蕊は「しほがま」屬に

ては必ず四箇にして内二箇は長く、二箇は短き所謂二強雄蕊なるも、本種は雄蕊五本、稀に四本なるも各蕊同長なる特長を有す。

其の後鹿野忠雄氏は中央尖山に昭和三年八月九日の次高山に同月二十五日之を採集した。

(49) 蘭の一珍種きばなくわくらんの新産

北部地方の低部山地殊に蘭陽地方の山地に多く自生する、大形のくわくらんの一産種であつて、私の長い間疑問させるものであつた。最近私は羅東郡太平山方面を旅行するの機会を得、同山約三千尺附近の山中處々に之を發見し、大なる花梗を抽出して多數の蕾を附けたるものあるを見て誠に欣快するものあるを以て、採掘して歸北せるも、途中運送方法宜しきを得ざりしを以て、之を鉢植せざるも、花蕾は漸次凋落して遂に開花するに至らず。適々臺北州勸業課の知友財津源吉氏の依頼により、開花せる一輪の完全花を、見事なる寫眞一葉を附して其の種名の鑑定を乞はれた、取つて之を見れば、正しく予の太平山に於て得たる本種に相違なきを思ひ、更に財津氏の好意によつて其の愛育家末吉歳助氏の私宅を訪ひ、實物を觀察するを得た。當時花期は既に過ぎたるも猶ほ數箇の完全なる花を有するものありしが故に、乞ふて一二の花梗の分譲を受け、以て研究に備へた。元來本種は早田博士及故相馬禎三郎氏及予が臺北州ウライ社に於て大正五年五月採集し、早田氏は其の著 *Icones Plantarum Formosanarum*, VI (1916) 74 頁に發表せる本島固有種で、學名を *Phajus Somai* Hayata と稱へ、稍々珍種に屬する。

最近臺北州大橋準一郎氏及財津源吉兩氏の好意によつて阿里山麓生毛樹より奮起湖に通する路傍に之を採集せられ、其の一株を予に又贈られた。

私は早田博士の文献に圖版がないので誠に潜越ではあるが一般人士にお知らせするために一枚物して参考に供する。

圖版説明

1. 全草寫眞 (末吉歳助氏撮影)
2. 花の正面
3. 單體雄蕊、距、唇瓣で他の花瓣を分離せるもの
4. 單體雄蕊及距、花被を分離せるもの
5. 花の側面